

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年七月二十一日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 金沢能楽美術館学芸員 山内 麻衣子

狂言 魚説法(うおせつぽう)

親の追善のためお堂を建立した所の者が供養に法談を催そうと寺へ住持を訪ねますが、あいにく留守です。応対に出た新発意しんぼちに來てもらうことにします。お布施欲しさに承諾した新発意はお経を知らず、魚の名をとりまぜて談義らしく説き聞かせます。「かやうのめでたい(觸)御代によも合はび(鮑)」から始まって飛魚のように逃げ帰るまで、ひたすら生臭い魚尽くしをキリなく連ねます。さて魚の名を幾つ、あなたは聞き分けられますか。

能 黒塚(くろつか)

熊野那智の東光坊の阿闍梨あじやり祐慶ゆうけいの一行(ワキ・ワキツレ)が山伏修行の旅の途中、陸奥むつぬの安達が原にさしかかり日が暮れたので野中の柴屋に宿を借ります。主あるじの女(前シテ)はわび住まいを憂え陋屋ろうおくを恥じていったんは断りますが、強いての願いに同情して一行を泊めることにします。杵むか杵か輪わ(糸繰り車)に興味を示す祐慶の求めで、せめてのもてなしに女は麻糸を繰って見せ糸尽くしの歌まで披露しながら、その間頻りに憂き世を嘆くのは、世渡る業の辛さだけでなく仏道に近づけない心の迷いがあるからです。夜寒の焚き火に木を取りに出る女は閨ねやの内をのぞくなど言い置きました(中入)。閨には腐爛ふらんした死骸が堆うずたかく積まれ、鬼の住みかとして逃げて行く一行に、鉄杖てつじょうをかざした般若鬼げんにゃき(後シテ)が襲あらしいかかります。しかし祐慶に祈り伏せられ、鬼性を恥じる声を残して夜嵐あらしの音に紛れて消え失せます。恐ろしい鬼女のむしろ深い悲しみが 印象的な、近江猿楽系の能のようです。

(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ (賤しんの女)

鬘まげをつけ、鬘まげ帯をしめ、曲見又は深井の面をかける。摺箔すりばくを着附きつけに着て、その上に色無唐織いろむとうしを着る。

後シテ (鬼女)

鬘まげをつけ、鬘まげ帯をしめ、般若げんにゃの面をかける。

終了予定 午後六時五十分頃